

1. 事前の状況

学級	抽出生徒
<ul style="list-style-type: none"> ・「道徳の授業で楽しいと思ったり、もっと学びたいと思ったりするときはどんなときですか」という質問に対して、全員が具体的な場面や出来事を回答することができ、これまでの道徳科の授業で学んだことが印象に残っている様子が見えがえる。 ・授業において、板書をノートに写し、丁寧かつ詳細にまとめているが、記述した自分の考えを他者に伝えることには消極的な生徒が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・道徳科の学習に対して肯定的に捉えている。しかし、「自分の考えを友達に伝えたい」「友達の考えを聞いてみたい」という質問には「どちらかといえば当てはまらない」と回答しており、考えを交流する活動への抵抗感があることがうかがえる。 ・自分の考えをまとめ、文章で表現することへの苦手意識から、記述することを敬遠する傾向があり、道徳科の学習に対して消極的な姿勢が見られる。



2. 評価とフィードバックに対する指導者の考えや気づき

- ・これまでは通知表の評価を重視していたが、評価とフィードバックを毎時間の授業で行い、積み重ねることの意義を理解することができた。
- ・生徒のノートの記述に対して、評価の視点を基に評価し、評価の視点別に下線を引き分けたり、評価する言葉を用いてコメント記入したりするフィードバックを継続的に行っていきたい。



3. 評価とフィードバックの充実に向けてのおもな手立て

- ・着目した生徒の記述を意図的指名によって全体に広げたり、問い返しによって生徒と生徒の発言を効果的につないだりして、フィードバックを行う。



4. 本時の様子

(1) 本時のねらいと展開

- 主題名 考えや立場の違いを尊重し合う 【内容項目 B 相互理解、寛容】
- 教材名 「ジコチュウ」(「中学道徳2 きみがいちばんひかるとき」光村図書)
- 本時のねらい(下線部は目指す生徒の学びの姿)

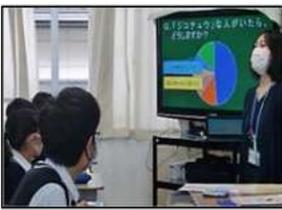
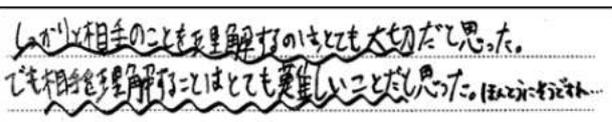


クラスメイトの言動を自己中心的だと一方的に判断しながらも自分自身を振り返っている「僕」について共感的に理解することを通して、考えや立場の違いを尊重し合うことに価値があることに気づき、そのために相互理解に努め、他者に対して寛容の心をもって接しようとする実践意欲と態度を育てる。

● 本時における評価とフィードバックの工夫

- ・展開において、教材の登場人物それぞれの立場に立って考えたり、他の生徒の考えを受け止めたりしている発言や様子が見られたことを評価し、積極的に認める言葉がけを行う。
- ・中心発問では書く活動を設け、記述の内容を把握し、評価した時点で個別に言葉をかけ、意図的指名につなげられるようにする。
- ・振り返りの記述については、一人ひとりのよい点や考えを認め、下線の引き分けによって評価を行う。学級通信や次時における前時の振り返りを行う時間を活用し、全体へのフィードバックを行う。

(2) 評価とフィードバックの実際

	学習活動・主な発問	評価・フィードバック ※()内は見取る対象
導入	1. 事前アンケートの結果を確かめ、主題に対して考える。	 <p>アンケート結果の共有</p>
展開	2. 教材「ジコチュウ」を読んで考える。 ○「僕」の課題は、どんなことだろうか。 ○佐々木からの手紙を読んで、その場に凍りついたようになった「僕」はどんなことを考えたのだろうか。 3. 考えを深める。 ◎考えや立場の違いを尊重し合うためには、どんなことが大切なのだろうか。(中心発問)	評価の視点①(発言) ☞言葉がけ、意図的指名 評価の視点④(発言) ☞言葉がけ、意図的指名 評価の視点⑥(記述・発言) ☞言葉がけ、意図的指名  <p>考えを交流する生徒の様子</p>  <p>記述内容を把握し、個別に言葉がけを行う指導者</p>
終末	4. 本時の学習で学んだこと、気付いたことを振り返る。 ○この学習を通して、感じたことや考えたことはどんなことか。	評価の視点: 道徳的価値や人間としての生き方についての考えの深まり(記述) ☞下線、コメント記入、学級通信への掲載  <p>生徒の振り返りの記述と指導者による下線とコメント</p>

(3) 本時に向けた授業構想および実践から学んだこと・気付いたこと

- ・生徒に事前アンケートを実施し、結果をスライドで提示した。生徒にとっては視覚的効果が高く、タイムマネジメントのうえでも有効だった。
- ・1単位時間の中で、全員が意思表示できる場面や自分の意見を書いたり発言したりする場面、他の人の意見を聴く場面等、様々な活動を評価の視点を基にして設定することで、学習過程にメリハリが生まれ、生徒にとって何をどのように考えればよいかのわかりやすかった。
- ・教材を通じて道徳的価値の理解を深めるために、生徒が教材の登場人物を共感的に理解できる発問や事例を示すことが必要であると実感した。本時の中心発問以降に生徒が自分事として考えられたのは、事前アンケートの結果と生徒の身近にある場面を例示し、個々に具体的なイメージをもてるように働きかけたことによる効果と考えられる。



5. 生徒の変容

学 級	抽出生徒
<ul style="list-style-type: none"> ・指名をしたとき、自分の考えを躊躇なく発表できる生徒が増えた。自分の考えを他者に伝えることに対する抵抗感が少なくなっている。 ・書く活動において、自分の考えを具体的に記述できるようになった生徒が目立つ。多面的・多角的な見方をしている記述の内容への発展や、自分自身との関わりの中で道徳的価値を理解したことへの自覚がうかがえるものになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1学期末の懇談会で、指導者が道徳のノートの記述から成長の様子が感じられる箇所を保護者に示し、フィードバックを行った。指導者に加え、保護者からも考えの変容についての言及があったことは、生徒が自己の成長を自覚する契機となった。 ・一つひとつの発問について、じっくりと考えて記述するようになった。振り返りでは、記述量の増加とともに、道徳的価値やこれからの生き方について考えを深めた内容も多くなり、印象に残った友達の考えやキーワードを自発的にノートに書き加える姿が表れた。



6. 指導者による振り返り(成果と課題)

<ul style="list-style-type: none"> ・本研究に取り組んで、評価に対する捉え方が変化した。毎時間の授業における評価とフィードバックの方法が分かった。これまで自分が行っていた生徒への個別の言葉かけやあいづち、記述に対するコメントの記入等が、実はフィードバックとして生徒の授業に臨む姿勢や考え方につながることを十分意識したうえで実践するようになった。これからも生徒に対して受容する言葉や共感する言葉、評価する言葉等を積極的に用いていきたい。 ・「道徳科の評価」は授業における評価であるため、生徒がどのようなことを、どのような方法で学ぶとよいのかという指導の方向性を明確にして、授業づくりを行うようになった。 ・生徒が自分事として考えることが難しい内容項目もある。その場合は、本時のめあてや学習課題を提示するタイミング、目指す学びの姿を実現するための授業展開、評価とフィードバックを工夫したい。

道徳科の授業を实践される先生方へのメッセージ



・道徳科の評価というと、指導者は不安や疑問を抱きがちになりますが、私は、評価を「授業の組み立ての指針」として捉え、生徒の成長の記録となることを目指しました。道徳科の授業で見取った生徒のよさや成長に対するフィードバックは、学級経営にも生かれます。

・指導の意図を明確にして、評価の視点を踏まえた授業を構想することにより、生徒が道徳的価値の理解を深め、目指す生徒の学びの姿に近付き、本時のねらいが達成できることを実感できます。